

「審かれているのは誰か」

(最高法院での裁判)

(マルコ14:53～65)

挽地 茂男

2019.8.25 日本基督教団・千歳丘教会

ゲツセマネで逮捕された主イエスは、大祭司の屋敷に連行されます。53節。「14:53 人々は、イエスを大祭司のところへ連れて行った。祭司長、長老、律法学者たちが皆、集まって来た。」新共同訳聖書の見出しは、「最高法院(サンヒドリン)で裁判を受ける」と書かれていますが、主イエスが連行されていったのは、エルサレム神殿の聖所の中にはあるサンヒドリンの議場ではなかったのです。しかもヨハネ福音書では、大祭司カイアフアのところではなく退職した大祭司アンナスの所に連行されています。福音書の記事が錯綜しています。主イエスの裁判のプロセスを把握するために、福音書に記録されている全ての情報を総合して整理しておきます。

まず逮捕された主イエスは、大祭司アンナスの所(屋敷)に連行されます。そして

①アンナスによる予備審問をう

けます。これを記録しているのは、ヨハネ福音書18章12～24節のみです。そしてアンナスによって予備審問がなされている間に、②最高法院(サンヒドリン)が臨時召集されたと考えられます。場所はアンナスの屋敷で、その年の大祭



アンナスとカイアフア(大祭司)

司カイアフアがイエスに対する予備審問を引き継ぎ、裁判が開始さ

れます〔ルカでは、夜の審問はなく一夜明けてサンヒドリンの審問が開始します〕。偽証人まで立てて、主イエスの罪を告発しますが、有罪判決にこぎつけることができません。しかし、その審理(裁判)の間、主イエスは黙っている(黙秘を続けている)ので、ついに大祭司が「お前は、神の子キリストか」と質問し、それを主イエスが肯定すると、

③一挙に冒涇罪が適用されて、最高法院(サンヒドリン)によって死刑の宣告がなされます。そして

④一夜が明けると、最高法院(サンヒドリン)を正式召集して、イエスの死刑を確認し、当時のサン

ヒドリンには死刑執行の権限がなかった——紀元30年ごろ、ローマの指示によって死刑の執行を禁止された——ので、ローマ総督ピラトの官邸に送致し、ピラトによる裁判が行われます。ピラトは主イエスに罪を認めることができないので、ユダヤ人の宗教問題はその民の支配者ヘロデに任せる、ということで、主イエスをヘロデの宮廷に送致します。

⑤このヘロデの審問を記録しているのは、ルカによる福音書23章6－12節のみです。ヘロデもイエス有罪の決定的根拠を見出すことができずに、

⑥ピラトのもとに主イエスは送り返され、ピラトは祭司長、律法学者、長老たちに誘導された群衆の「十字架につけろ、十字架につけろ」という言葉に押し切られて、十字架による死刑判決を下します。つまり

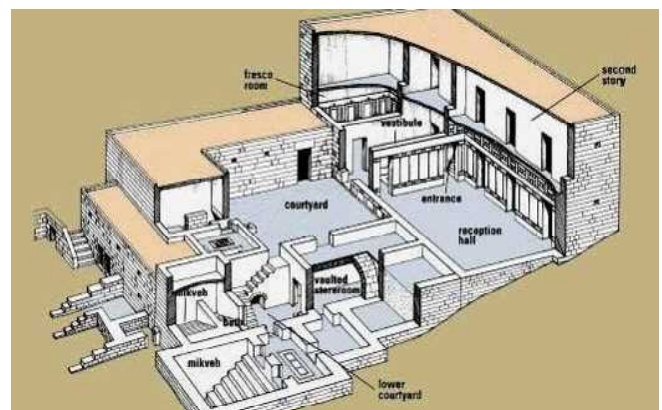
- ①アンナスによる予備審問
 - ②カイアフアによる裁判
 - ③サンヘドリンによる最終決定
 - ④ピラトの裁判
 - ⑤ヘロデの尋問
 - ⑥十字架の判決
- という6段階の流れになります。

この流れを頭の片隅に置いておきましょう。

最初に行われた「アンナスによる予備審問」はヨハネ福音書にしか記録されていませんので、ヨハネ18章12－24の記事に従って、まとめておきましょう。ゲツセマネの園(あるいはその付近)で逮捕された主イエスは、エルサレムの南西部にある、大祭司の官邸に連行されます〔現在は大祭司官邸の後に鶏鳴教会が建っています〕。そこでは、大祭司カイアフアの舅のアンナスが待っていました。正式な裁判が始まる前に、アンナスは有利な証言を引き出すことをもくろんで、大祭司官邸内で、イエスの弟子や教えについて尋問します。主イエスは



大祭司屋敷跡に立つ鶏鳴教会



大祭司の官邸

会堂や神殿で公然と教えていたのだから、教えを聞いていた人たちに聞けばよいのであって、ここで繰り返す必要はないと答えます。すると、主イエスのこの不遜な答えに怒った下役の一人（εἷς τῶν ὑπηρέτων）が、「大祭司にそのよ



うな答え方を
するの
か」と言っ
て主イエス
を平手で打
ちます。こ

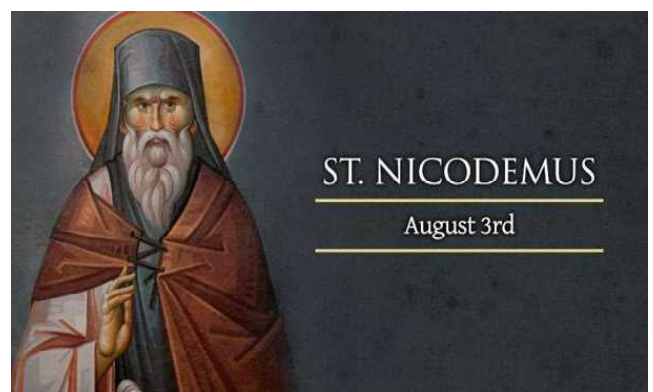
れに対して主イエスは抗議をします。そしてアンナスは、臨時召集を完了した最高法院（サンヘドリン）とその議長大祭司カイアフアにイエスを任せます〔ヨハネ福音書では「アンナスはイエスをカイアフアの所に送った」（18:24）とありますので、これに従うと両者は別のところに屋敷・官邸を構えていたことになります。〕。

こうして大祭司の屋敷に集まってくる最高法院（サンヒドリン）のメンバーに混じって、別の動機で動いているもう一人のことも——今日の箇所では特段の動きを見せないのですが——心に留めておきましょう。ペトロです。54節。

14:54 ペトロは遠く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで入って、下役たちと一緒に座って、火にあたっていた。



さて臨時とはいえ、主イエスを陥れるための絶好の機会がやってきます。イエスの死を勝ち取るための最高法院（サンヒドリン）の開廷です。祭司長たちと最高法院は最初から主イエスを死刑にするつもりでした。それがこの裁判の目的です。そしてこの裁判には、死刑の根拠をでっち上げてでもその目的を達するために、偽証人まで用意していたのでした。〔偽証人を立てたのに有罪に出来なかったのは議員団の中にニコデモ（「議員」ヨハ3:1／7:50-51、19:39）やアリマタヤのヨセフ（「議員」マコ15:43／「弟子」マタ27:57、ヨ



ハ19:38)といったイエスに好意的な議員がいたからかも知れません。]

みなさんは、聖書を読んでおられて、大祭司と祭司長の関係はクリアになってますか。少し気になりますか。実はギリシア語では大祭司と祭司長は全く同じ言葉(ἀρχιερεὺς)が使われているのです。大祭司は最高法院(サンヒドリン)の議長ですから、正式にはいつも一人なのですが、任期を終えてもやはり「大祭司」と呼ばれ続けるのです。アンナスがすでに任期を終えているのに大祭司と呼ばれているのはそのためです。日本語訳では特別に「大祭司」と呼ばれる必要がないときには、「祭司長」と訳し分けているのです。

「祭司長」と出てくれば、それは退職した大祭司のことなのです。



ところでこの大祭司アンナスが正式の大祭司カイアフアの時代になってもしゃしゃり出てくるのには、理由があります。まずカイアフアの舅と書かれていますから、それが理由の1つかもしれません。義理とは言え父親ですから。この①**アンナス**は紀元6－15年までの9年間大祭司を務めます。その後任として、②フィアビの子イシュマエルが15－16年大祭司を務めます。次いで③**アンナスの子エレザル**が16－17年大祭司を務め、次に④カミトスの子シモンが17－18年大祭司を務め、その後⑤**アンナスの義理の息子**(今日の箇所が登場する)**カイアフア**が18－36年の18年間大祭司を務めます。カイアフアのあとはまたもや、⑥**アンナスの子ヨナタン**が36－37年まで大祭司を務めます。実に6代の大祭司のうち4代がアンナスとその子ども(義理の息子も含むアンナス一族)であり、大祭司6代の全就任期間31年間のうち29年間をアンナス一族が占めているのです。

アンナスが、ここから、どれほどの実力者であったか想像が出来ます。しゃしゃり出てきても当然

なのです。彼は隠然たる実力者で、いわば総理経験者の親族から多くの総理を輩出するというような、フィクサーいわゆるエルサレム神殿の「ドン」(親分)なのです。その義理の息子大祭司カイアフアは舅のアンナスが9年大祭司を務めたのに対し、18年大祭司を務めます。彼は実務的判断力に優れた大祭司であったようです。ヨハネ福音書11章49－50節にはこう書いてあります。「11:49 彼ら(サンヒドリン)の中の一人で、その年の大祭司であったカイアフアが言った。『あなたがたは何も分かっていない。11:50 一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が減びないで済む方が、あなたがたに好都合だとは考えないのか』」。

「一人の人間が民の代わりに死ぬ方が好都合だ」とあるように、彼は計算が得意なのです。たとえ不正義が行われたとしても、都合と実利が彼の判断基準なのです。「一人の人間」とは主イエスのことです。イエスが死ねば厄介ごとは終わる、とカイアフアは読みます。このカイアフアの実利を達成するために、「一人の人が死ぬこと」に向かって、イエス有罪の立証が

画策されました。もともと主イエスを殺すつもりなら、面倒な実証手続きなどなしで、早く死罪を確定してしまえばいいのではないか。その権力を使えば、それくらいのことは出来るのではないのか、と思うところですが、彼には正義が必要なのです。計算があるのです。少なくとも「正義のゆえ」主イエスの死罪が確定されたように、見えていなければならない。それが彼の計算なのです。「自分はイスラエルを代表する大祭司」なのですから。表面ずらは辻褄をあわせなければ成りません。

55－56節。「14:55 祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にするためイエスにとって不利な証言を求めたが、得られなかった。14:56 多くの者がイエスに不利な偽証をしたが、その証言は食い違っていたからである。」主イエス



にとって不利になる偽証がとびだしたものの、有罪を実証することはできませんでした。でもまだ手があります。

そこで主イエスが神殿について語った発言が冒涔の証拠だと引き合いに出されます。これも偽証だと言われています。57－59節。

「14:57 すると、数人の者が立ち上がって、イエスに不利な偽証をした。14:58 「この男が、『わたしは人間の手で造ったこの神殿を打ち倒し、三日あれば、手で造らない別の神殿を建ててみせる』と言うのを、わたしたちは聞きました。」14:59 しかし、この場合も、彼らの証言は食い違った。」神殿に対する冒涔的な発言が問題にされました。これにも誰かの反論があったのかも知れませんが、おそらく「手で造らない別の神殿」などという空想的表現を、単に空想的な発言としてではなく、死罪に相当するものとして実証するのが、難しかったのでしょう。この言葉は弟子たちにも分からなかった、とヨハネ福音書には書かれています。ヨハネ2章19－22節。「ヨハ2:19 イエスは答えて言われた。『この神殿を壊してみよ。

三日で建て直してみせる。』2:20 それでユダヤ人たちは、『この神殿は建てるのに四十六年もかかったのに、あなたは三日で建て直すのか』と言った。2:21 イエスの言われる神殿とは、御自分の体のことだったのである。2:22 イエスが死者の中から復活されたとき、弟子たちは、イエスがこう言われたのを思い出し、聖書とイエスの語られた言葉とを信じた。」この証言もまた、全体的な合意から有罪の確定に至りません。

しかし一方で、これほど周りが騒ぎ立てているのに、主イエス是一言も言葉を発しません。イザヤ書の〈苦難の僕〉の預言の言葉が主イエスの姿に重なります。イザヤ書53章7節「彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開か



なかった。」

主イエスは、沈黙を続けます。カリアファは業を煮やしたように主イエスに迫ります。60節。「14:60 そこで、大祭司は立ち上がり、真ん中に進み出て、イエスに尋ねた。「何も答えないのか、この者たちがお前に不利な証言をしているが、どうなのか。」それでも主イエスは黙っています。そこでカリアファは切り札になる質問をぶつけます。61節。「14:61 しかし、イエスは黙り続け何もお答えにならなかった。そこで、重ねて大祭司は尋ね、「お前はほむべき方の子、メシアなのか」と言った。」カリアファは主イエスを「メシア詐称」の容疑で落とそうとしているのです。ここでも黙秘を続けていても良かったのかも知れませんが、主イエスには裁判に勝とうとする意図がありません。主イエスは答えます。62節。「14:62 イエスは言われた。『そうです。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、／天の雲に囲まれて来るのを見る』」。ビンゴです。カリアファは主イエスから言質をつかんだのです。そして、63－64節。「14:63 大祭司は、衣を引き

裂きながら言った。『これでもまだ証人が必要だろうか。14:64 諸君は冒涇の言葉を聞いた。どう考えるか。』一同は、死刑にすべきだと決議した。」しかしこのビンゴは主イエスにとってもビンゴだったのです。「ほむべき方の子」つまり「神の子」、神の油注がれた「メシア」救い主であることがいまや明らかにされる時が来たのです。たとえ有罪とされようともです。

何が有罪に当たるのかを整理しておきます。まず主イエスの証言の後半から。「あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、／天の雲に囲まれて来るのを見る」という言葉は、有罪に当たりません。この言葉は、神はこのような不正な裁判をお見逃しにはならず、やがて全能の神のもとから遣わされる人の子によって、真と偽、正と邪、善と悪をはっきりとお裁きになる。白黒をおつけになるという発言です。この発言



だけでは罪に問えません。主イエスが「わたしが人の子」とであると
言えば別ですが、ここでは「人の子」は三人称で言及されていますし、現在の状況では有罪に当たると断定することは不可能です。そうすると問題は、主イエスの「**そうです**」と答えに集約されます。主イエスが「**ほむべき方の子、メシアなのか**」という大祭司の問いに「**そうです**」と答えて、自分が「**ほむべき方(神)の子**」であり、神によって油注がれた「**メシア**」と認めたことで有罪が確定したことになります。ふつうそれが罪状であったと主張されます。しかしこの「**そうです**」にはもう少し深い意味があります。この「**そうです**」という言葉は、マルコ福音書の13章をお話したときに出てきた、神の顕現定式「エゴー・エイミ」という言葉なのです。「エゴー」は「わたし」、「エイミ」は「である」とか「いる／ある」と意味です。英語の方がわかりやすいでしょう。英語では“I am”です。ですからわたしたちの聖書の「**そうです**」という訳はそれで正しいのですが、聖書の伝統に照らし合わせますと、もう少し深い

意味があります。

つまりこの「**そうです**」(‘Εγώ εἰμι エゴー・エイミ)という表現は、神さまが人に自分を顕すときに使われる言葉(神の顕現定式)なのです。この言葉の大本になっているのは、すでにお話ししたように、出エジプト記3章14節で神がモーセに自らを顕す場面です。その箇所をギリシア語訳(70人訳)旧約聖書で見ると、こうなっています。「**出3:14 神はモーセに、『ἐγώ εἰμι エゴー・エイミ。わたしはあるという者だ』と言われ、また、『イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。』**イスラエルの伝統の中で、「わたしはある(エゴー・エイミ)」が神の自己顕現を意味する表現の型として定着して(定式化して)、新約聖書で使われるようになります。



福音書では(主イエスが特別な場面に姿を現すときの)顕現定式として使われます。(1) マルコによる福音書 6 章 50 節(マタ14:27 || ヨハ6:20) で、主イエスは、嵐の湖を歩いて弟子たちの乗っている舟に近づきます。弟子たちは幽霊だと思い恐怖にとらえられます。



その場面で湖上にいる主イエスの口から、

この言葉が語られます。6 章 50 節。「マコ 6:50 皆はイエスを見ておびえたのである。しかし、イエスはすぐ彼らと話し始めて、「安心なさい。エゴー・エイミ ἐγώ εἰμι (新共同訳「わたしだ」)。恐れることはない」と言われた。」主イエス(神)が共におられることを示します。また(2)ルカ福音書 24 章 39 節では、復活した主イエスが弟子たちに現れる(復活顕現)場面に出てきます。イエスが言います。「ルカ24:39 わたしの手や足を見なさい。まさしくエゴー・エイミ ἐγώ εἰμι (新共同訳「わたしだ」)。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなた

がたに見えたとおり、わたしにはそれがある。」さらに、(3)マルコ 13 章 6 節(マタ20:15/ルカ21:8)では偽キリストがこの言葉(ἐγώ εἰμι)を使います。「マコ13:6 わたし(イエス・キリスト)の名を名乗る者が大勢現れ、『エゴー・エイミ ἐγώ εἰμι(新共同訳「わたしがそれだ」)』と言って、多くの人を惑わすだろう。」

わたしたちが今日読んでいる(4)マルコ 14 章 62 節(ルカ22:70)では、裁判の席での大祭司の「お前はほむべき方の子、キリストなのか」という審問の言葉に答えます。正義を振りかざし、それを偽証で実証しようとする人々。正義の茶番を演じている人々。神を審く人々の前で、こう言います。マコ14:62 イエスは言われた。「エゴー・エイミ ἐγώ εἰμι (新共同訳「そうです」)。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、／天の雲に囲まれて来るのを見る。」有罪です。自分を神と等しくしたからです。有罪です。もし彼が神でなければ有罪です。しかし、もし神であれば、審いている者が有罪です。大祭司は被告の「この罪深さには我慢がならぬ」とばかり

に、大仰にも「衣を引き裂」いて宣言します。「これでもまだ証人が必要だろうか。14:64 諸君は冒涇の言葉を聞いた。どう考えるか。」議場にいた「一同は、死刑にすべきだと決議」します。

そして有罪が確定した罪人に相応しい扱いが、主イエスに加えられます。人々は、主イエスを見下し、嘲弄し、もてあそぶのです。

65節。「14:65 それから、ある者はイエスに唾を吐きかけ、目隠しをしてこぶしで殴りつけ、「言い当ててみろ」と言い始めた。また、下役たちは、イエスを平手で打った。」主イエスの姿は、ここでも〈苦難の僕〉の姿と重なります。イザヤ書53章2b-4節。

「(この人には)見るべき面影はなく／輝かしい風格も、好ましい容姿もない。53:3 彼は軽蔑され、人々に見捨てられ／多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し／わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。53:4 彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり〔神に罰せられ〕、打たれたから／彼は苦

しんでいるのだ、と。」

大祭司アンナス、大祭司カイアフア、最高法院(サンヒドリン)の議員たち、そして彼らに仕える下役たち。正義を装い、神を冒涇から守ろうとする見せかけの関心を演じるこのジェスチャー・ゲームの参加者たちは、実際は人の子の御前で自分自身の有罪判決を確定しているのです。

主イエスは死罪に定められました。しかし今を生きていました。人の子の来臨する未来を確信しながら、今を生きていました。苦難を十二分に生きていました。彼は屠り場に連れて行かれるように羊のように、黙して語らぬ〈苦難の僕〉、その苦しみによって人々の救いの道を拓く〈僕〉なのです。それが主イエスの生涯の目的でした。人それぞれに賜物があり、それぞれの人生に意味と目的があり



ます。主イエスはご自身の目的を
生き抜かれたのです。キリスト教
は表面的な〈ハッピー〉を約束す
る宗教ではなく、神に赦され、神
に生かされ、神と共に生きている
ことの確信を通して、心の底から
湧き上がってくる〈喜び〉を与え
る宗教なのです。

新しい一週間も、主と共に歩み
出しましょう。祈ります。

2019.8.25 日本基督教団・千歳丘教会



14:53 人々は、イエスを大祭司のところへ連れて行った。祭司長、長老、律法学者たちが皆、集まって来た。

14:54 ペトロは遠く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで入って、下役たちと一緒に座って、火にあたっていた。

14:55 祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にするためイエスにとって不利な証言を求めたが、得られなかった。

14:56 多くの者がイエスに不利な偽証をしたが、その証言は食い違っていたからである。

14:57 すると、数人の者が立ち上がって、イエスに不利な偽証をした。

14:58 「この男が、『わたしは人間の手で造ったこの神殿を打ち倒し、三日あれば、手で造らない別の神殿を建ててみせる』と言うのを、わたしたちは聞きました。」

14:59 しかし、この場合も、彼らの証言は食い違った。

14:60 そこで、大祭司は立ち上がり、真ん中に進み出て、イエスに尋ねた。「何も答えないのか、この者たちがお前に不利な証言をしているが、どうなのか。」

14:61 しかし、イエスは黙り続け何もお答えにならなかった。そこで、重ねて大祭司は尋ね、「お前はほむべき方の子、メシアなのか」と言った。

14:62 イエスは言われた。「そうです。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、／天の雲に囲まれて来るのを見る。」

14:63 大祭司は、衣を引き裂きながら言った。「これでもまだ証人が必要だろうか。」

14:64 諸君は冒瀆の言葉を聞いた。どう考えるか。」一同は、死刑にすべきだと決議した。

14:65 それから、ある者はイエスに唾を吐きかけ、目隠しをしてこぶしで殴りつけ、「言い当ててみる」と言い始めた。また、下役たちは、イエスを平手で打った。

14·53 Καὶ ἀπήγαγον τὸν Ἰησοῦν πρὸς τὸν ἀρχιερέα, καὶ συνέρχονται πάντες οἱ ἀρχιερεῖς καὶ οἱ πρεσβύτεροι καὶ οἱ γραμματεῖς.

14·54 καὶ ὁ Πέτρος ἀπὸ μακρόθεν ἠκολούθησεν αὐτῷ ἕως ἔσω εἰς τὴν αὐλὴν τοῦ ἀρχιερέως καὶ ἦν συγκαθήμενος μετὰ τῶν ὑπηρετῶν καὶ θερμαινόμενος πρὸς τὸ φῶς.

14·55 οἱ δὲ ἀρχιερεῖς καὶ ὅλον τὸ συνέδριον ἐζήτουν κατὰ τοῦ Ἰησοῦ μαρτυρίαν εἰς τὸ θανατώσαι αὐτόν, καὶ οὐχ ἠύρισκον·

14·56 πολλοὶ γὰρ ἐψευδομαρτύρουν κατ' αὐτοῦ, καὶ ἴσαι αἱ μαρτυρίαι οὐκ ἦσαν.

14·57 καὶ τινες ἀναστάντες ἐψευδομαρτύρουν κατ' αὐτοῦ λέγοντες

14·58 ὅτι Ἡμεῖς ἠκούσαμεν αὐτοῦ λέγοντος ὅτι Ἐγὼ καταλύσω τὸν ναὸν τοῦτον τὸν χειροποίητον καὶ διὰ τριῶν ἡμερῶν ἄλλον ἀχειροποίητον οἰκοδομήσω.

14·59 καὶ οὐδὲ οὕτως ἴση ἦν ἡ μαρτυρία αὐτῶν.

14·60 καὶ ἀναστὰς ὁ ἀρχιερεὺς εἰς μέσον ἐπηρώτησεν τὸν Ἰησοῦν λέγων, Οὐκ ἀποκρίνη οὐδέν τί οὗτοί σου καταμαρτυροῦσιν;

14·61 ὁ δὲ ἐσιώπα καὶ οὐκ ἀπεκρίνατο οὐδέν. πάλιν ὁ ἀρχιερεὺς ἐπηρώτα αὐτόν καὶ λέγει αὐτῷ, Σὺ εἶ ὁ Χριστὸς ὁ υἱὸς τοῦ εὐλογητοῦ;

14·62 ὁ δὲ Ἰησοῦς εἶπεν, Ἐγὼ εἰμι, καὶ ὅψεσθε τὸν υἱὸν τοῦ ἀνθρώπου ἐκ δεξιῶν καθήμενον τῆς δυνάμεως καὶ ἐρχόμενον μετὰ τῶν νεφελῶν τοῦ οὐρανοῦ.

14·63 ὁ δὲ ἀρχιερεὺς διαρρήξας τοὺς χιτῶνας αὐτοῦ λέγει, Τί ἔτι χρεῖαν ἔχομεν μαρτύρων;

14·64 ἠκούσατε τῆς βλασφημίας· τί ὑμῖν φαίνεται; οἱ δὲ πάντες κατέκριναν αὐτόν ἐνοχὸν εἶναι θανάτου.

14·65 Καὶ ἤρξαντό τινες ἐμπτύειν αὐτῷ καὶ περικαλύπτειν αὐτοῦ τὸ πρόσωπον καὶ κολαφίζειν αὐτόν καὶ λέγειν αὐτῷ, Προφήτευσον, καὶ οἱ ὑπηρέται ῥαπίσμασιν αὐτόν ἔλαβον.

イザヤ書 5 3 章

53:1 わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあるか。

53:2 乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように／この人は主の前に育った。見るべき面影はなく／輝かしい風格も、好ましい容姿もない。

53:3 彼は軽蔑され、人々に見捨てられ／多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し／わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。

53:4 彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と。

53:5 彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち碎かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

53:6 わたしたちは羊の群れ／道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪を

すべて／主は彼に負わせられた。

53:7 苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった。

53:8 捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか／わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり／命ある者の地から断たれたことを。

53:9 彼は不法を働かず／その口に偽りもなかったのに／その墓は神に逆らう者と共にされ／富める者と共に葬られた。

53:10 病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ／彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永く続くのを見る。主の望まれることは／彼の手によって成し遂げられる。

53:11 彼は自らの苦しみの実りを見／それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために／彼らの罪を自ら負った。

53:12 それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし／彼は戦利品としておびたしい人を受ける。

彼が自らをなげうち、死んで／罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人の過ちを担い／背いた者のために執り成しをしたのは／この人であった。